武市春男先生の人となりと業績

○　武市春男先生が七十歳になられたと聞いて，ほとんどの人が耳を疑ったと聞きました。実は私もその一人です。ですから私がここでご紹介する武市先生は，古稀記念論文集を前にして，しみじみと来し方をかえり見ておられるという姿の先生ではありえないことになります。つまり，年齢が何歳になろうと関係なく，ただただ，ご多忙に明け暮れておられる，ご研究とお仕事の中にある武市先生を，ご紹介することになることをお断りして筆を起します。

○　武市春男先生は，昭和三年九州帝国大学法文学部（現，九州大学）をご卒業せられ，初めからのご自分の希望と決意の通り，全く自然の形で，教育と学問の世界に入られました。爾来四十三年，まっしぐらに教と学，両全の道を実践して来られ，そして今もなお，まっしぐらにその道を進んでおられるのであります。

○　先生は昭和三年九大ご卒業後，名古屋の市立第三商業学校で教育のスタートを切られましたが，その後二，三校転任され，東京府立第四商業学校長，東京都視学官を経て，昭和二十一年には当時商業教育界の最高峰といわれた東京都立第一商業学校の校長に就任されました。そして昭和三十年，停年を待たずに退職して中京大学教授となり，さらに乞われて東京都立商科短期大学に転じ，四十一年には学長の任につかれました。ここまでの教育界でのご功績により，本年四月二十九日，勲三等瑞宝章を授与され，教育者として最高の栄誉を担われたことは，われわれの記憶に新しいところであります。一昨年同大学が昭島市に移転するのを機会に，任期終了を前に学長の職を辞されて，それまで実際上全力を尽しておられた城西大学経済学部に，名実ともに専念されることになりました。以上が先生の教育界における表向きの略歴であります。

○　しかしこの間に先生は，いわゆる「のんきな」先生ではなかったので，子弟の教育指導ばかりでなく，教育制度の刷新，教育行政の改革などのため

に，縦横無尽に駆けめぐっておられた，というのが当るような活動をしておられました。事蹟の内容は挙げて数うべくもないのですが，ひと時，東京都視学官として教育行政の中枢部に入られて，教育刷新の企画と指導実践に当って居られました。そのさい特にアメリカの教育界の視察に赴かれ，アメリカ式の教育の良さと問題点とを見て帰られましたが，ご帰朝談では，その良さとしてプラグマティズム的実践性を，問題点としてその精神面を挙げられ，日本的教育の中にある精神的な面の良さにも言及して居られたことを記憶しています。また幾つかの私立大学の創立に参与しておられ，全くお一人の力で仕上げられた大学があることも洩れ承って居ります。

学校の創設については，先生の本領をよく発揮された一つの例があります。それは某公立学校が創立されたさい，最初の校長として就任され，学校の施設を，木一本草一本から仕上げて行かれたときのことです。その学校は，新しいながら今なお，同列の他の学校を圧して名門校としてうたわれていて，会社の人事部はその学校の卒業生を得るために特別の考慮を払っていると聞いています。その学校の当時の生徒や先生がたが，いまなお武市先生を敬慕していることは言うまでもありませんが，なお驚くべきことは，その学校の周辺の家々の人々が「初代の元気な校長さん」として，今なお，お顔や姿まで思い出せると言っていることであります。自慢というものには余りにも縁遠い武市先生ですが，この学校のことについては，例えば，この学校の当時の先生がたが，「先生の同窓会」を持っていて，そのメンバーの中には，校長さんが7人，大学教授3人，博士2人いることについては，大いに威張られるのであります。案ずるに武市先生の学校経営の理念の一つは，ある種の「学校協同体」を作り上げることにあったのではないでしょうか。

○　武市先生は，真っ向から教育理論を持ち出されるようなことはされない。むしろ実践の中から，また日常作業の中に，教育を打込んで居られる，そんな感じではないでしょうか。今でも大学の廊下や教室に落ちているタバコの吸殻を黙って拾って居られる。経済学部を緑で包んでみせるといって，セッセと木を植え，芝生を作り，草花を育てておられる。それは理屈ではない，提唱

でさえもない。いわゆる「ほんまもの」なのである。

○　始めに教学両全の先生という言葉を使いましたが，武市先生は教育界で以上のような目覚ましい活躍をされ，時には耐えられぬ激務ともいわれる役割を果して来られましたが，先生は教育者である以上に，学問研究者であります。先生のご専攻は法律学，ことに商法学であります。筆者はこの点では良き紹介者ではないことを申訳なく思いますが，名古屋に居られた時既に九大の恩師大沢章先生の序文で飾られた「法律学概論」を出して居られます。当時はまだ法律学概論としては，そのころ有名だった「みずま」の「法学概論」以外二，三を数えるにすぎなかった時代でありますから，その新鋭の気概は思うべきものがありました。その頃先生のお宅の書斎に，支那の某学者が先生に献じた次の五言絶句の詩の額がかけてあったことを忘れ得ません。

未　学　題

丈　夫　兼　文　武
随　時　向　書　市
大　業　督　青　春
我　亦　愛　賢　男

学問に精進し，心身を鍛え，書物を愛し，人を愛する境地が，座右にすがすがしい若さを感じさせたものであります。それからつぎつぎに驚くべき多数の著書，論文を発表されましたが，一昨年，昨年の二年間には，畢生の著作ともいうべき二部作「イギリスの法律格言」「ドイツの法律格言」を出されたことは周知のとおりであります。ここで主要なる著書を挙げさせて頂きますと次の通りであります。

昭和30年3月25日	新会社法概要	国元書房
同　31年4月30日	商事法	コロナ社
同　36年4月20日	イギリス会社法	国元書房
同　43年11月1日	イギリスの法律格言	国元書房
同　45年9月30日	ドイツの法律格言	国元書房

○　忌憚なく言えば，日本の学者の本で長い生命のあるものは必ずしも多く

はないと言えましょうが，この最近の武市先生のご著作は，長い研さんの集積の中から生れたものであって，後世に残ることを確信します。中でも最近の「法律格言」二部作は時代を経るにしたがって値打ちが上昇してくるものと断言できます。いわゆる世の「格言」「ことわざ」というものは，永世変らぬ人の心と世の姿の真髄を伝えるもので，滋味まことに尽きぬものでありますが，「法律格言」というものは，先生の序文で説かれているように，世の「ことわざ」と似たところもありますが，かなり異った要素を含んでいるようであります。むしろそれは，ある意味では法の淵源であり，人間社会生活の，立証を超えた規範のようなものを含んでいる。あるいは人間の社会生活の中から自然にわき出た知恵のほとばしりと言うべきものでもありましょうか。Die Wahrheit liegt in der Mitte.（真理は中間にあり）という格言を，その昔教室で，有名な法律学の先生の講義の中で聞いてハッと打たれた思いがしたことを思い出します。それは立証を超えた真理である。そうした言葉が泉のごとく溢れているのが，この「法律格言」の二部作であります。武市先生は学生時代から「法律格言」を生涯の研究テーマの一つにしようと決意しておられたと聞いています。だからこのご研究は歴史が古いのです。これについては一つの挿話があるのです。先生が月給百二十円の若い頃，八十円のドイツ格言集を丸善で買ったところ，あとから奥様に「つけ」が回ってしょげられてしまい，平謝りしたというお話です。宜なるかな，「ドイツの法律格言」の序文には，ついに，「妻俊子は，わたくしの我儘をよく耐え忍びこれを思えば私情ながら，いとおしむ心で一杯である」という先生自身のお言葉がのっています。学者のお話として，楽しくも美しいことではないでしょうか。

○　先生はまだ沢山の研究テーマを持っておられるようです。会社組織法の問題，流通証券の問題，国際私法の問題，法律学以外では産業の発展と人の問題など，常に念頭を去らない題目を胸の中に温めて居られるようであります。先生がこれらのテーマの話に入ると熱がこもる。われわれは，それが，いつ，どういう形で現われるかが楽しみであります。学問研究の分野においても，先生は，やはりまだ若者であると，つくづく思います。

○　武市先生は，甲州（山梨県）のお生れであるが，土佐（高知県）の武市家に養子として入られました。土佐の武市家と言えば，坂本竜馬の親友で，勤王の烈士である例の武市半平太のことであります。先生はその養子であるが，やはり選ばれただけあって，性格的に一脈相通ずるものがありそうです。武市先生の真っ正直な，直情の実践家というご性格の一面は，受け継がれた精神的遺産とも言えるかもしれません。然し筆者の長い目で見たところでは，これは先生の生来の持ち前とも言うべきものだと思います。甲州生れといっても，先生のご生家は，明治初年，東京財界を震撼させた，「天下の雨敬」といわれた雨宮敬次郎，その後，根津嘉一郎，神戸挙一など，いわゆる甲州財閥人発祥の地で，いわゆる気骨のある「しっかり者」の故郷であります。先生のどこかに，それが潜んでいるのではないか，そう思うのです。亡くなった友人の遺稿の出版に熱を上げる，亡くなった恩師の記念事業に同志を集める。亡き師の墓所の建碑運動に心魂を傾ける。母校に問題が起り，同窓会に異変があると必ず出かけて行く。この種のことは挙げ切れないのです。終戦後失意の友人後輩で先生から良き助言応援を得た人は数知らずだと思います。良いと思うことは「黙っておれない」，悪いことは，なおさら「黙って見ておれない」，それから「善意と誠意による介入」になり，そしてそれがすぐ「実行」に移される，これが先生の「行動の原理」のように思われるのであります。

○　ところがこれに明朗にして磊落を付け加えねばならないでしょう。先生は戦後ロンドンを手初めにヨーロッパに学問の旅に出られたことがあります。その時の大英博物館でのご勉強ぶり，ヨーロッパの古い大学の雰囲気や研究施設の視察など，特にその時の勉学の一端が，「イギリス会社法」となり，「法律格言」となり，またこれからの研究に実るであろうことは，時々洩れ伺うのですが，公開の席での西欧話は，もっぱらヨーロッパ社会の面白さしか，口に出されないことは周知のところであります。こんな点から見ても全くのヤンチャさんであります。これにもう一つ不羈にして気骨リウリウをプラスしたら，本当の先生の全貌が伝えられるかと思います。さてしかし，ここまで来ると筆者も大分筆が走りすぎて，お叱りを受けそうであります。もともと人の性格，人

柄などというものは，どんなに分析したって描き切れるものではありません。この記念論文集の編集の労をとって居られる井口大介先生が「原稿が集りすぎて，研究学会誌一年分をはるかにオーバーし，しかも残念ながら一部の先生の原稿を期限打切りにせざるをえなかった」と洩らしておられます。こんなところに武市先生に対する人々の信望の様子が知られるので，これ以上あえて冗舌を用いる必要はないでありましょう。

○　先生は今や人生古来稀れなる七十歳に達せられましたが，教学両全，教育に学問に一身を打込んでおられます。教と学とが武市先生の中で全く自然の形で一体に納ってしまっています。先生はこの道を一途に歩いて来られましたが，なお今からもずっと，少しも変らぬテンポで歩き続けて行かれることでありましょう。

○　この文を終るに当って月並みかもしれませんが，心から先生に申し上げたいことがあります。古稀なんて言葉は昔の人が作ったものだから，やはり武市先生は，今まで通り，好きな本を集め，本を読み，本を書き，人を愛し，学生を愛し，木を愛し，花を賞で，そして何にもましてわれらの大学を愛していっていただきたい。ただしかし，もう一つ大切なことは，先生の本当の奥にある温いものを，もう少しご自身のためにもお傾けになって，白寿を越えるまで，「われわれの城西人」として，そしてまた先生を知る皆んなのものの友人として居ていただきたい，このことをお願いし，祈念致したい，と心から申し上げます。

（望　月　敬　之　記）